The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	民間学としての柳田民俗学
Author(s)	中村, 生雄
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1997, 31, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56482
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

民間学としての柳田民俗学

中村生雄

晩年の日本人論

昭和二十九年に柳田国男は、シリーズ出版である毎日ライブラリーの一冊として『日本人』を編集し、一部をみずからが執筆して刊行した（毎日新聞社、一九五四年）。同書の「あとがき」で柳田の述べるところによれば、彼がこの企画を引き受けることになった理由は、「日本人」という題目が自分にとって「きわめて魅力のある名称」であったためであり、にもかかわらず、このテーマを扱った従来のおびただしい数の著書論文に彼が満足できなかったからだという。そこで柳田は、みずからがその完成に向けて専心してきた「日本民俗学の成果を利用する」には、この企画がこのうえない機会であると判断し、主要な弟子たち六人に分担執筆をさせ、さらに「日本人」と銘打った彼らをまじえての座談会記録を巻末に添えて一冊を構成した。ちなみに分担執筆者と座談会に加わった六人の弟子とは、和歌森太郎、堀一郎、萩原龍夫、最上孝敬、大藤時彦、直江広治であった。

この時期、満八十歳を目前にし、すでに学士院会員となり（昭和二十四年）、文化勲章を受賞して（昭和二十六年）

日本の知的世界の最高峰に位置していた柳田じしん、戦後の混乱期をかろうじて脱したとはいえいまだ明確な将来像を描けないでいる日本社会の現状に何らかの見取図を残しておきたいとする責務を感じていたであろうことは間違いない。とりわけそのことは、この前後が柳田の実質的な遺著ともいうべき『海上の道』の諸編が書き継がれている時期にあたり、それが日本民族の起源を南にもとめ、その道筋が原日本人の渡来のルートであるとともに稲作渡来のルートでもあることを執拗に論証しようとする、柳田が生涯の最後に全精力を注いで打ち立てんとした学問的仮説の生みの苦しみの時期でもあることを考えれば、思いなかばに過ぎるものがある。

さて、柳田みずからが筆をとった第一章の「日本人とは」によれば、まずこれまで繰り返されてきた日本人論の多くは、傑出した人物とか稀有な出来事を例にしてそれで日本人のすべてがそうであったと見なすとか、あるいは逆に、きわめて劣悪な状態をもって日本人一般の性格とするといったような、不正確で偏った議論ばかりであったという。言うまでもなくこれは、柳田がこれまで強く主張してきた文献史学にたいする批判のポイント、すなわちそこでは英雄・豪傑の歴史かそれとも一揆と飢饉の歴史しかなく、文字を残さない民衆の生活はまるで無視されてきたという批判に重なっている。そのうえで柳田は、そんな両極端に偏らない真実の日本人の姿を民族全体の立場から考えることが必要であり、そうして初めて、「これから先、国を少しでも明るく、そして健全なものにしていく」ことが可能だと言う。そしてそのための具体的な方法としてあげられるのが、「この長い歴史の中に包含されている民族的な弱点を各人に意識させること」なのである。つまり、理想的なケースをもって全体を称えるのでもなく、最悪の事態を見て落胆するのでもなく、より公正で正確な眼力をやしなったうえで「民族的な弱点」を探り当て、それを地道に克服していくことこそが、これからの日本人にはもっとも必要なことだというわけだ。

あらましそういうふうな立場を明らかにしたうえで、柳田が本章で指摘している日本人の「民族的な弱点」というものは、整理してみるとおおよそ次の三点にまとめられるであろう。

まず第一は、日本人の「大勢順応主義」。これは決して日本にだけかぎるものではなくて、ひろく東洋の社会全般に見られる傾向であるが、ものごとの価値をそれぞれがきちんと確認することなく、世の大勢についていこうとすることばかりに一生懸命になることである。ちょうど魚や渡り鳥が群れの動きに従うように、世の大勢を見極めて全体の進む方向についていきさえすれば安全だ、という考えがきわめて強かったというのである。ちなみに、すでに『雪国の春』（『柳田国男全集』第二巻）の一節で柳田は、日本人の「妥協性」や「事大性」といったものが「島国」ゆえの宿命であり、つねに海を越えて異郷に移る必要がそうした性格を生み出したのだと書いていた。

そして第二には、第一の大勢順応主義を実行に移すさいの手立て、すなわち世の大勢を推し量るための実際的な基準として、安直な「指導者信仰・知識人信仰」が浸透していたということ。すなわち、大勢のおもむくところを知るという目的のために、日本人は群れの先頭にいるのが誰かということばかりを気にして、その人物の言うことなら闇雲に信じてしまったということである。ところがそういうふうに群れの先頭に立っているかに見える人物というのは、往々にして机上でものを書いているだけの人が多く、彼らはむずかしい古典や外国の書物のことばをそのまま取り入れて、相手がよく理解できなかったりまごついたりすることを予期して、自己の権威を誇張し、優越感をいだくのだと指摘する。

さらに第三の弱点としては、目前の利害だけ、自分や自分の属する家のことだけを考えればよいとする「利己主義」があげられる。他人を押しのけてでも前に進んでいかなければならないという焦燥に国民全体が駆り立てられ、

その果てには仲間を裏切ることも平気で、自分の安全のためなら外国に従属することもいとわないという具合だとする。

念のため言っておけば、以上に要約した三つの特徴、すなわち「大勢順応主義」「指導者信仰・知識人信仰」「利己主義」の語は、柳田の説くところにしたがって私が仮りに名づけたもので、柳田じしんの用語ではない。いずれにせよ、おおむねこの三点をもって柳田は日本人の「民族的な弱点」と見なしたうえで、それを一つ一つ克服していくためにこそ人は歴史を学ばねばならないと主張するのである。

こうした議論の運びを眺めてくると、このとき柳田は、あたかもこれまでの自分の学問の総決算のようにして「日本人とは何か」という大問題に立ち向かおうとしたかに見えるが、それがいつのまにか、日本における史学の任務は何であるかといった、それまで幾度となく繰り返してきたテーマに回帰していることに気づかざるをえないはずである。

史学と民俗学

周知のとおり、これまでにも柳田は、歴史学こそがその実践的な課題のゆえにもろもろの学問のなかでも特権的な任務をもっていることを、『青年と学問』（昭和三年）や『国史と民俗学』（昭和十九年）などの著作の端々で繰り返してきた。そのような史学への期待は、この晩年の編著のなかでも一貫している。

筆者はやはり歴史の学問が重要だと考えている。歴史というものは今までのように、年代や偉人の業績ばか

りを覚えさせるのが目的ではなく、人間が形成する社会生活の中で、客観的に自分のなすべきことを悟り得、また素養と知識とをもって次の判断を正確にすることにある。（中略）

われわれが説く歴史的なものの見方の必要は、これこれの知識をもっていなければならぬというような根本的な人間の修養にもかなうけれども、それ以外にやはりよく生きる、あるいは正しい社会をつくるということの必要から来ているのである。

こういった言い方で、柳田は歴史を見る目を養うことの目的が、教養のための知識でも好事家的な知識でもない、社会のなかで生きていくうえでの実際的な知恵を身につけるところにあるとしている。これは言うまでもなく、すでに戦前の『郷土生活の研究法』（『柳田国男全集』第二八巻）において「学問救世」の目的をかかげ、「何ゆえに農民は貧なりや」との根本問題を解明するのが学問の最終目的であって、その目的を達成するためであれば自分たちの学問が「実用の僕」となるのは決して恥ではない、と述べていたのと呼応するものだ。机上において客観的な事実を探求するのを至上目的とする文献史学の行き方を痛烈に批判し、日本人の大多数を占める農民の幸福をいかに実現するかが、農政官僚の時代からの柳田の終始変わらぬ姿勢であったことは今さら繰り返すまでもないことだろう。

柳田の考える歴史は、過去にかんする客観的な知識の集積としての歴史でもなかったし、過去と現在とのつながりを時間の軸に沿って一定の物語に織りあげる作業としての歴史でもなかった。逆に、柳田の見るところではそうした学問の多くは、特定の見方を押しつけ、人から柔軟な思考力、判断力を奪うイデオロギーでしかない、という

ことになる。とはいえ、柳田の主導してきた日本の民俗学が、そのような困難を乗り越え新しい成果を生み出したと強弁するほどに彼は傲慢ではなかった。たとえばやはり柳田の執筆にかかる本書第三章の「家の観念」の一節で、次のように民俗学の成果の不十分さを告白している個所を見れば、そのことは明らかであろう。

学問は、すぐ世の中の役にたつものではないということをよく哲学者は口にするのであるが、しかしながらいくつかの需要がここにあれば、少なくもいちばん目前のもっとも痛切な要求に答えうることを、まずもって学びとらなければならない。そういった意味で、民俗学が今日までに成し遂げたことというのは、実をいえば、人に誇るに足るほどの仕事はしていないのである。

いずれにせよ、このような議論の経緯を見ると必ず思い出されることがある。それは、戦前の昭和十年の夏に、柳田の還暦を祝う名目で門弟たちがお膳立てをして開かれた「日本民俗学講習会」での彼の講演の内容だ。昭和の初め『民族』の編集をめぐって生じた柳田とその協力者たちとの疎隔がこの時期になってある程度修復の兆しを見せ、この講習会をバネにしてそのおなじ年に「民間伝承の会」がスタートするにいたったこと、また、実質的にはこの会が戦後の昭和二十四年に日本民俗学会と名称を変更し、現在まで民俗学研究の中心的な学術機関となっている、といった経緯についてはのちにも言及しよう。

ただこのとき行なわれた記念講演（改題して「実験の史学」、『柳田国男全集』第二七巻）で、柳田が、「人が何ゆえに貧苦を脱し得ないか、村がどうしていつまでも衰微感のために悩まされているか」というような大問題のおのおのには必ずその理由が過去にあるのだから、「これに答える者は歴史でなければならぬ」と言って、史学への過大

な期待をあらわにしていたのを忘れるわけにはいかない。そして、何ゆえに歴史がそのような実践的な課題に答えうる学問領域なのかという点について、柳田の理解はきわめて明解だ。

歴史は単に過去の事実の記憶せられ説明せられて今日に伝わっている形で、これもまた眼の前の事実に過ぎぬが、我々はすべての現世の事相には皆原由があり、その原由は総て今よりも以前、すなわちこの国の過去にあったと認めるがゆえに、時としては身を遼遠の昔において、親しくその真相を把握しようと試みるのである。

現在の「貧苦」の由って来る源は必ず過去の事実のなかにひそんでいるのだから、その事実を最大限掘り起こしていけば、現在の困難を克服し解消する手立てもまた見えてくるという、考えようによっては途方もなく楽天的な希望がここには述べられている。従来の史学がそれを実現できなかったのは、それが日の当たる偉人の歴史ばかりで構成されていて、日の当たらぬ、もの言わぬ常民の生活と信仰に、史学の視線が届かなかったためだというわけである。しかも、柳田がそういうときの「過去」が、もっぱら日本一国に限られていたことも、合わせて注目しておく必要がある。

私たちの見るところでは、あらゆる社会現象は原因なくしては起らない。そうしてこの国限りの問題である以上、その原因も必ず国の内にある。それが見つからぬというのはないからではなく、消えてあとかたもなくなっているか、人が忘れて心づかぬか、ないしは知ろうと力めなかったかの、三つに一つである。通例は無責任に、その第一の場合と断定することがはやるが、うっかりとは信じられない。なくなれば結果もなくなりそ

うなものだ。すなわち形をかえて、原因はなお潜んでいるのである。

もちろんこのように、柳田が問題を日本に限局し、一国史的な立場だけで問題を処理しようとしているのは、この時期が柳田の「一国民俗学」への確信が最高潮に達したときに当たっていたからにほかならない。そのような彼の姿勢を、当時の民族学者・人類学者の多くが我れ先に植民地経営と海外進出のためのデータ提供者になろうとしていた事実とつきあわせて見るなら、アジア侵略に寄与する学問を厳しく禁じた、きわめて冷静な態度と評することも可能だろう。

連続する戦前と戦後

しかし今ここで考えてみたいのは、この発言が日本民俗学講習会という、彼の志す学問を具体的にになう組織体が、やっと産声をあげるにいたった場面で行なわれていたことである。そして、このような柳田の歴史理解、あるいは学問がになうべき歴史的な任務についての見解が、彼が久方ぶりに新興の学問の提唱者としてスポットライトを浴びる公式行事のただなかで語り出されたということ、そのことは決して見過ごしにできぬ問題をはらんでいたのではないかと思われる。

というのは、これから遅れること十四年の昭和二十四年にも、上述した日本民俗学会の発足にあたって、おなじような趣旨の講演「日本を知るために」（『柳田国男全集』第二六巻）が柳田によってなされることになるからである。敗戦をはさんで十四年もへだたっているというのに、双方の講演で話された内容には、それほどの時間の経過

や日本国家の激変を思わせるところがない。むしろそれらは、意図においても実質においても柳田の学問観・歴史観の「断絶」ではなく「連続」をしめしているようなのである。そしてさらに先回りして言うなら、小論でとりあげた昭和二十九年の編著『日本人』での柳田の主張さえもが、ほとんどこれらの単純な繰り返しだったと思わざるをえないのだ。

それはさておき先に記したように、件の日本民俗学講習会がはずみとなって昭和十年に発足した「民間伝承の会」は、着実にその機関誌『民間伝承』を出しつづけ、戦争末期から敗戦直後の休刊期間をへて昭和二十一年八月にはやくも復刊されていた。急展開する時局の推移に左右されることなく、これほどまでに一貫した形態で民間の学術誌が発行されつづけたのはたしかに驚嘆に値する。そこに柳田の超人的な持続への志を読み取ることも十分可能だろう。そしてその会が日本民俗学会と名称を変え、大学を拠点とする一般の学術団体の体裁に衣替えしたのが昭和二十四年のことであり、それまで民間学であることに固執し、アカデミックな学会組織への改変を拒否していた柳田も、ついに周囲の説得に応じて新学会の発足を了承し、その幕開けの年会で「日本を知るために」という記念講演を行なうにいたったのであった。

そこでこの一文を目にすると、その楽天的な祝賀気分にいぶかしい思いを禁じえないのだが、柳田はまず、昭和十年の「民間伝承の会」発足前後の事情を無邪気に回想することから話を始めている。柳田は、当時民俗学の大成に熱い期待を寄せて活気づいていた四囲の雰囲気を懐かしみ、そのころが、「今から考えてみると、まことに好い時代」だったと言って上機嫌なのである。民俗学を志す人びとを全国規模で結集し、まる一週間にもわたって講演と研究発表がつづけられ、さらにプログラムのなかには柳田じしんの還暦祝賀の席もたくみに組み込まれるなど、そ

れが、彼にとっては年来の希望もかない、『民族』分裂以来のわだかまりや確執もやっと心底から氷解した幸福な一週間だったことは当然だろう。そのとき柳田は、還暦の民俗学など困難だ、とユーモアを交えて挨拶しつつも、当然のこととして初代会長におさまったのであった。そうした懐旧談にひたりながら柳田は、本来なら「永々御苦労様」とこれまでの労をねぎらわれるのが普通なのに、それを今回の新学会発足にあたってまたまた引っ張り出されるのは酷な話だ、というような謙辞を並べつつふたたび初代会長を引き受け、斯学の将来をことほぐのである。こうしたことからも、柳田の民俗学にかける楽観的な期待と、その未来を託すに足るだけの弟子が存在しないという悲観的な現状認識において、戦前と戦後に何の違いもなかったのがわかる。

というのも、戦後にふたたびめぐってきた民俗学のハレの場で、柳田が自分たちの学問の任務としてかかげるものは「実験の史学」でのマニフェストとほとんど変わっていないからである。柳田はここであらためて「一国民俗学」の意義を強調し、その学問の抱負を次のように回顧的に語って倦まないのである。

> 我々の手を出している間口は広く、しかも前代に対するあらゆる疑問が、結局は皆釈けるようになるのを、理想とすると言った状態が、私たちの学問の出発点でもあったからである。世には象牙の塔などと称して、人生社会の用に立つか否かを詮議するのを、下品なことのように厭がる気風がつい近い頃まであった。（後略）

が、そんな悠長なことは時代により国により、また学問の種類によっては許されるかもしれないが、として以下のようにつづける。

私なんかは俗物だからとうていそんな気にはなれない。何とかしてもっと具体的に、自分たちにもできることはこれだけと世の中に披露して、それによってほかからも当てにせられまた励まされ、そうしてまたもっと張り合いのある勉強がしてみたいのである。

このように、柳田は十五年まえに述べた史学の任務をここでも同様に繰り返す。象牙の塔の中に自閉し、実用に役立つことを恥じるような権威主義的学問への不信は、ここでも変わらない。過去にたいする新しい学問の姿勢が確立されさえすれば、現在の課題にたいする対処のしかたもおのずから知られるはずだという柳田の楽観的な信念に、何の揺らぎも見られない。正統史学への型どおりの批判を投げかけることをとおして、柳田は戦後の学問の任務と戦前のそれとの幸福な一致を見出している、と言ってもいいだろう。

もっとも、そんな楽観的な信念の披瀝だけで事をすまそうとするには、この十四年のあいだの日本の変わりようは大きすぎた。二つの発言のあいだに敗戦という大事があったのだから、柳田とて当然そのことに言及しないわけにはいかなかった。なぜなら、戦争が柳田のめざす国民の幸福を根こそぎ覆してしまったという眼前の事実に、このとき誰も目をつむるわけにはいかなかったからである。

口にするさえも情けない「日本はなぜ敗れたか」、もしくはどうして今日のごとき状態に陥ってしまったか、答はここにあるという人がいくらあろうとも、今までお互いがまるっきり心づかなかったことがこれほどあり、まだこれからも次々と現われて来そうな形勢に直面しては、とうてい私たちはそのでき合いの答を受け取って、さようでしたかと言っている気にはなれない。(中略)何としてでもこの莫大な新しい知識を整理して、おいお

いとその中から、動かない原因を見出して行こうと努めなければならない。その方法をやや気永に、日本民俗学会が立ててみようとしているのである。

なるほど、敗戦の原因をあれこれと説明してみせる政治家や知識人が、政界にも言論界にも入れ替わり立ち替わりしたり顔してあらわれるのを、柳田は苦り切って眺めてきたにはちがいない。むろんのこと、彼らの「日本はなぜ敗れたか」の説明が正鵠を得たものだとは柳田には思えない。だからといって、柳田がそれらをしのぐ説明をしえなかったのも事実であり、そもそも戦中にあって、彼が「実験の史学」でまえもって宣言したごとく、現下の戦争の「原由」を民俗学の課題として剔出しえなかったのも明白である以上、ここでの政治家批判・知識人批判もおのずからトーンダウンせざるをえないというものだ。それは明らかに、柳田の主導した民俗学全体の失態であり、彼らすべての不明を白日のもとにさらしたことになるのだが、そのような引け目を感じればなおさら、民俗学は「日本はなぜ敗れたか」の説明を「おいおいと」追求し、「やや気永に」そのための方法を確立しようという、はなはだ威勢の悪い言い方しか出てこなかったということだろう。

この歯切れの悪さは、昭和二十一年の「現代科学ということ」（『柳田国男全集』第二六巻）で話された率直で苦渋にみちた自省の弁と読みくらべるとき、明らかに際立っている。そこでは、国民すべてを何の疑いもなく死地におもむかせ、そのことに誰もが異を唱えることのない世の中が出現していたこと、しかもそのような異常事にたいして民俗学も柳田じしんも臆病きわまりない態度で気楽に構えていたと悔いていた（拙著『折口信夫の戦後天皇論』法蔵館、一九九五年、二二四頁以下、参照）。そうした真摯な後悔の気持が、次のような新たな学問への決意を促し

たのは疑いない。

今一つの最大の問題、すなわちどうしてこのように負けてしまったかということは、今も眼の前の生々しい現実とからんでいるが、ともかくもすべてもう歴史である。しかも書いたものもなくまた書くこともできない歴史、すなわち在来の史学の取り扱わぬ事実で、我々の民俗学が引き受けなければならぬ歴史である。人によってはこれは歴史としてはあまり生々し過ぎる。もう少しよく熟させてから味わうべきだと思う者があるかも知れぬが、それは損な話だと私などは思う。

敗戦後まだ一年ばかりで、いまだ焦土は復興の気配もなく、国政の行方も見通せないこの時期、柳田はこれを「すべてもう歴史」だと断じ切り、その敗因を見定めるべくみずからを叱咤激励しているようである。敗戦前からすでに「働かねばならぬ世」の到来を見抜き、着々と準備を始めていた柳田であったからこそ、この早い時期に戦争という未曾有の出来事を過去の出来事、つまり「歴史」と見なし、その由って来る真の原因を確定しなければならない、そしてそのような重要な任務を果しうるのは、在来の史学ではなく新興の民俗学を措いてほかにはない――、そう大見得を切っている。真意のつかみにくい曖昧な言い回し、幾重にも含みをもって読みうる文体を常用していたいつもの柳田を基準にすると、ここでの決然たる意思表明はいかにも異例のことだ。『先祖の話』や「新国学談」三部作の仕事などで、「働かねばならぬ世」に率先して飛び込んでいった柳田は、その余勢を駆り、古い史学の息の根を一気に止めようとしているかに思える。先述のとおり、戦前から在来史学の非実用性を攻撃してきた柳田にしば、この敗戦直後の今、まさにそうした史学の存在理由が根底から崩れつつあるのを感じたのかもしれない。史学

滅んで民俗学興る、――そんな一種の昂揚状態のうちに、柳田の気分は置かれていたと見ておこう。それは、戦前からつづいた柳田の史学にたいする過大な期待と、それゆえの大きな不信感とが並立する、アムビヴァレントな姿勢の一つの帰結でもあったろう。

しかし、そうした気迫にみちた民俗学への抱負は、三年後の「日本を知るために」ではまったく姿を消す。そこでは、先に見たように敗戦の因を「おいおいと」追求し、そのための方法を「やや気永に」探っていきたいとする、はなはだ微温的な気分が行き渡っていた。それは、史学に替わって民俗学の新生をとなえた「現代科学ということ」からの一歩も二歩もの後退であり、さらに言えばかつて批判の俎上に載せた史学の非実用性に民俗学も同調し、それに膝を屈したも同然の姿勢だと評するほかはないものなのである。

民間学としての柳田学

さて、昭和二十九年の編著『日本人』の一節を手始めにして、ずいぶん大回りをしながら柳田の歴史意識、あるいはそのような歴史意識に応じた学問の任務について、彼の戦前戦後の折りおりの発言を概観してきた。そしてそこから気づくのは、敗戦直後の「現代科学ということ」を唯一の例外として、柳田の学問論と歴史意識にはほとんど変化も発展も見られないことであり、またその種の発言が、彼のめざす民間伝承の学や民俗学が新しい段階に踏み出すさいの、柳田によるオフィシャルな信条の開陳として語られていたことである。それは、『郷土生活の研究法』においても「実験の史学」においても、また戦後まもなくの「日本を知るために」においても共通していた。あとから振り返って見れば、それらの公式マニフェストは、柳田民俗学の存在意義を社会的に認知せしめる必要が生じ

たとき、決まって持ち出される基本スローガンのような性格を帯びていたことがわかる。

しかも見逃せないのは、それらの発言が民俗学の普遍的な意義を述べるものであったとはいえ、実際それが語られた場というものが、日本民俗学講習会であったり、日本民俗学会の最初の年会であったりというように、実質的には木曜会に始まる柳田の私的な研究サークルの拡大版という色合いが濃かったことである。いわばそれは、日ごろの柳田による内輪の研究活動が、やや改まってその対外的な意義を明示する必要に迫られたとき、鸚鵡返しのように繰り返されたスローガンだったのではないかという印象をぬぐいがたい。

そう考えてみれば、それが晩年の『日本人』において大同小異のしかたで反復されることになるのもさして不思議ではないというものだ。なぜなら、この編著が柳田のごく身近かの門弟たちとの共作であったという点で、それが従来の記念日的（アニヴァーサリー）な基本信条の開陳と異なるところはなかったであろうからである。

もちろん以上のような見通しは、あくまでもさしあたっての表面的な印象にすぎない。が、じつはそれは、しばしば肯定的に評価されてきた柳田学の民間学的な性格の一面とも深くかかわるものではないかと考えられる。先にも一言したように、民間伝承の会の活動が戦中にもほとんど途切れることなく戦前の形態のまま維持できたのは、それが国策機関に吸収されることなく民間学でありつづけようとしたからこそであったと一応は言える。そのことは、民間伝承の会に先だって組織化されたエスノロジストの学術組織たる日本民族学会が、戦中には文部省直轄の民族研究所に呑み込まれていき、敗戦と同時に解体の憂き目にあったことを考えれば明白であろう。

それとは対照的に、柳田学にはつねに柳田個人とその協力者からなる私的な研究サークルといった側面が一貫して残っていった。そのような柳田学の性格は、遡れば龍土会・イプセン会に始まり、郷土会・南島談話会などをへ

て木曜会へとつながる、柳田学そのものの揺籃としてあった民間の同好的サークルのありようから深く影響を受けていよう。またそのような民間の知的サークルに柳田が積極的にかかわっていった背景には、言うところの彼の農政官僚としての挫折体験があったことを否定するわけにいかない。そして言うまでもなく、柳田のそのような志向が民間学という反官学の立場への執拗なまでのこだわりとなってあらわれたことも理解しやすい。

したがって、小論で見てきたような柳田国男における史学への過度の期待とそれゆえの深い絶望といった対極的な態度は、おそらく柳田じしんの国家にたいするアムビヴァレントな態度のあらわれにほかならないもので、それは具体的には、近代国民国家に奉仕するための学問としての官学への過度の期待と、またそのような官学の実情にたいする深い絶望という、柳田の前半生を見舞った主要な経験に深く影響された現象であったにちがいない。

そしてそのことは、編著『日本人』の第三章「家の観念」で柳田が「日本人の歴史」をめぐって洩らした、夢想とも祈りともつかない次のような言明、すなわち、「日本人というのは、それは一つのかたまりであり、そしてそのかたまりの中には幸福の差異や階級の序列は若干あったろうけれども、そういうものを超越した一団の日本人というものの歴史を特に筆者は考えてみたかったのである」という願いと決して無関係ではない。

この一節にはからずも露呈している柳田の日本人理解の抽象性・観念性が、柳田民俗学の民間学としての性格にも深く影響を及ぼしているにちがいないが、その詳細については他日を期すことにしよう。

（文学部教授）